

分科会 C 2

【テーマ】「医療関連学部生のための教育学習支援（教育学習支援 Part II）」

【要 旨】

ラーニングコモンズや情報リテラシー教育、授業と連携したサービス等、大学図書館における学生の教育学習支援の事例発表が盛んである。しかしながら、臨床実習や国家試験を控えた医学部や医療関連学部における特有の教育制度に即したサービスについて、体系的な議論がなされてきたとは言えない。そこで、医学および医療関連学部をもつキャンパスの図書館における教育学習支援サービスのあり方について多面的な話題提供をいただき、学部や他部署も含めたキャンパス全体の事情も鑑み、誰がどのような支援をすることが教育パフォーマンスの向上に役立つのか、議論をしていきたい。

1. 「医科大学図書館が学生に対して実施している授業の実態調査」

全国の医学部を持つ大学80大学の図書館に対して実施した調査（平成22年12月）の結果を報告する。調査の対象となる内容は、オリエンテーションと、図書館員が関わる授業（学科関連指導及び学科統合指導）である。

2. 「スタディライフ調査にみる学生の学習場所」

慶應義塾大学信濃町メディアセンターでは、近年多様化する利用者像の把握や館内外に新たに設置された学習スペースの充足度を把握するために、スタディライフ調査を実施した。調査から導かれた学部生のための教育学習支援の方向性について報告する。

3. 「Learning space renovation of Medical libraries : A case for Yonsei University」

「医学図書館における学習スペースの改装：延世大学原州医学図書館の事例」

図書館における電子リソースの台頭に伴い、印刷版雑誌の購読数は減少してきた。書架は空きが目立ち、来館者数は減少している。これらの問題を解消するために、延世大学原州医学図書館では、快適な学習空間づくりを目指し利用者スペースの改装を行った。空き書架に代わり新設されたウェブアクセスエリア、セミナールーム、AVルーム、休憩室などが多くの来館者を引き付けている。

【座 長】

慶應義塾大学文学部図書館・情報学専攻・協会理事

酒井 由紀子

【話題提供】

1. 「医科大学図書館が学生に対して実施している授業の実態調査」

山下 ユミ

京都府立医科大学附属図書館

2010（平成22）年12月、全国の医学部を持つ大学80大学の図書館に対してアンケート調査を実施した。調査内容は、オリエンテーションと、図書館員が関わる授業（学科関連指導、学科統合指導）である。回答は、2010年度の実績（実施見込を含む）を元に記入を求め、対象は学部生を対象とする授業等に限り、大学院生を対象とする授業は含まないこととした。

アンケートの結果、新入生オリエンテーションを実施している図書館は医学科では70館、

87.5%、看護学科では 64 館、89%で実施していた。また、情報リテラシー教育の授業は、64 館、80%で実施していた。授業以外に、講習会やセミナーを実施している図書館も多いと思われるが、今回の調査では対象としていない。

授業を実施している館に、ほぼ毎年授業を実施している学年を回答してもらったところ、医学科 1 年生～6 年生と看護学科 1 年生～4 年生の中で、看護学科 3 年生に対する授業をしている図書館が一番多く、40 館（看護学科を持つ大学の中では 56%）だった。その他には 1 年生への授業を実施している館が多く、医学科 1 年生は 30 館（37.5%）、看護学科 1 年生は 24 館（33%）であった。もっとも少なかったのは、医学科 6 年生で、1 館のみで実施していた。

2010 年度に実施された授業は、全部で 157 科目であった。授業全体の傾向をみると、一番多いのは「情報検索法（種類と特性等）」が 136 科目（87%）、次に「データベース検索演習」が 127 科目（81%）で行われていた。また、個々のデータベースでは、最も多い 134 科目（82%）で使われていたのが、所蔵検索データベース（OPAC）だった。その他、多かった順に、医中誌 Web（115 科目、70%）、PubMed（67 科目、41%）、CiNii（55 科目、34%）、NACSIS Webcat / Webcat Plus（43 科目、26%）であった。

分科会では、先行研究との比較、医学科と看護学科の比較、自館のプログラムへの示唆等の考察を加え発表する。

2. 「スタディライフ調査にみる学生の学習場所」

園原 麻里

慶應義塾大学信濃町メディアセンター

当館では学習支援に関する諸サービスの企画・実施に際し、利用者の学習ニーズや学習実態を把握することが必要であると考え、2012 年度に学部生・大学院生を対象としたスタディライフ調査を実施した。本調査の概要は以下のとおりである。

1. 背景と目的

新規学部・研究科の設立に伴い、当館の利用者の多様化が近年顕著である。本調査では、多様化する利用者の学習実態や学習ニーズを把握し、図書館サービスに応用することを目的とした。また 2008 年度の LibQUAL+® 調査結果 1) に基づき館内に設置・改修したセミナー室・グループ学習室や、キャンパス全体に新たに設置された学習場所に関する評価を得ることも本調査の目的としている。

2. 方法

1) 調査手法

質問紙およびインタビューにより調査を実施した。

質問紙調査はインタビュー調査のための基礎的情報の収集を目的として実施し、多肢選択式質問と日記形式の項目を用意した。多肢選択式質問により、来館頻度や当館ホームページの利用頻度、インターネットサイトや SNS の利用頻度など、利用者の基本的な情報入手行動を把握した。日記形式の質問紙では利用者の学生生活全般、学習時間、構内の滞在場所を尋ねた。質問紙調査の結果および当館利用者の学習状況の観察を踏まえ、利用者が学習場所を選択する際に関連すると思われる要素を導いた。

インタビュー調査ではこれら学習場所の選択要素を仮説として採用し、各学習場所の選択理由を確認したほか、当館に対する要望を収集した。

2) 対象者

2012 年度は第一期（5-6 月）に医学部 2-6 年生、看護医療学部 3 年生、健康マネジメント研

究科修士課程を対象とし、第二期（2-3月）に薬学部5年生を対象として実施した。

本調査の協力者は計65名であった。うち、アンケート有効回答数は61名、インタビュー参加者数は25名であった。

3. 結果

1) 学生生活全般

学生生活や、学習以外の自由時間の使い方などは所属や学年により様々であったが、学事日程や学習イベントに影響を受ける点はこの所属グループにも共通していた。

2) 自主学習時間

自主学習時間が突出していたのは修士論文の提出を控える健康マネジメント研究科2年生や、病院実習中の医学部5年生である。これらのグループは自主学習のニーズが高だけでなく、履修中の授業数が少なく、キャンパス内の拘束時間が少ないことも共通していた。

3) 自由時間の構内滞在場所

所属により滞在場所は様々であったが、当館、部活動関連のスペース、普段授業で使用する教室、実習生専用確保された実習室、教室に面するラウンジが滞在場所として挙げられた。学習場所の選択要素としては、パソコンが使用できるか、自分の行動範囲内に位置するか、自分が学習したい時間にその場所が使用できるかが重要であった。

4) 当館に対する要望

特に目立った要望としては、パソコン利用の際の利便性の向上、集中して行う学習と話しながら行う学習のすみ分け、開館時間延長の3点であった。

4. 当館の対応

約30点の要望を部内での改善検討の材料とした。協議の結果、実施できるものは時期を設定した上、2013年度の事業計画に盛り込んだ。保留の項目については、追加調査等により継続して検討する。本調査により整理できた当館の強みと弱み、学生の学習スタイルの特徴は今後の業務改善に生かす予定である。

参考文献：

1) 酒井 由紀子. LibQUAL+ (ライブカル) による図書館サービス品質評価 慶應義塾大学信濃町メディアセンターにおける実践. 医学図書館. 2010 ; 57 (2) : 181-6

3. 「医学図書館における学習スペースの改装：延世大学原州医学図書館の事例」

金 柱石
延世大 原州醫學圖書館

図書館における電子リソースの台頭に伴い、印刷版雑誌の購読数は減少してきた。書架は空きが目立ち、来館者数は減少している。これらの問題を解消するために、延世大学原州医学図書館では、快適な学習空間づくりを目指し利用者スペースの改装を行った。空き書架に代わり新設されたウェブアクセスエリア、セミナールーム、AVルーム、休憩室などが多くの来館者を引き付けている。

【コーディネーター】

慶應義塾大学文学部図書館・情報学専攻・協会理事

酒井 由紀子